確定版

第２回生涯学習センター指定管理者選考委員会会議録

１　開催日時　令和３年 10 月 11 日（月）15：30～16：30

２　開催場所　市役所３号館　３階　301 会議室

３　出席委員　委員長　　蛭田　道春（当該施設に関し専門的知識を有する者）
　　委　員　　梨本　加菜（学識経験者）
　　委　員　　櫻井　聡　（関係団体代表者）
　　委　員　　渡邉久美子（市職員　施設に関連のある部署の課長）
　　委　員　　髙橋　直人（教育委員会職員　施設を所管する課長）

４　事務局員　生涯学習課　社会教育総務主査　島内さおり、同係主任　張石　文子
　　同係主任　　遠藤　雅弘、同係　　杉山　一美

５　傍聴者数　２人（公開プレゼンテーション・質疑応答時）

６　第２回選考委員会の概要

第２回選考委員会においては、申請団体による公開プレゼンテーション及び委員から申請団体への質疑応答を行った。

７　議事の概要

（１）開会

開会に先立ち、事務局が、指定管理者選考委員会等条例第４条による定足数を満たしており、本委員会が成立していることを報告した。

事務局から、応募者説明会を経て申請書類の提出は１団体であったことを報告し、傍聴に関しては、傍聴要領に基づき、10 名までとすること（新型コロナウイルス感染拡大防止のため、会場の大きさを勘案して傍聴人数を決定）、申請団体のプレゼンテーション及び質疑応答については、公開で行い、申請団体のプレゼンテーション時間は 30 分以内、選考委員会の質疑は 30 分程度とすることなどを説明し、各選考委員から承認された。

傍聴希望者については、委員長の許可により、入室させた。

冒頭で傍聴者に対し、プレゼンテーションは、申請書類に基づいた内容の補足やアピールを行う機会であり、発表の技術で選考されるものではないこと、傍聴における遵守事項についての注意を行った。

申請団体が入室した後、委員長から申請団体に挨拶し、各委員を紹介した。

（２）申請団体による公開プレゼンテーション

公益財団法人横須賀市生涯学習財団の説明者３名から自己紹介に続き、配布資料に基いた発表が行われた。

資料「必要とされ持続する社会教育施設を目指して」（別添のとおり）

・学習の場の提供
・学びの情報の提供
・学びの機会の提供
・学びの成果の活用

提案内容のコンセプトは、「必要とされ持続する社会教育施設を目指して」として、だれでもいつでもどこでも学べる生涯学習社会の実現、市内全域に学びの裾野を広げたいという思い、文部科学大臣表彰を受けたことのアピール、これまでの生涯学習センター管理運営事業、市民大学事業、学習情報提供・学習相談事業、その他の事業の実績とともに提案内容に関する説明を行い、今後も事業間での連携を図り、新たな広報、ホームページ新規コンテンツや新たな SNS の導入、受講生カムバック戦略、ABC プラン C キューブ等を行い、市民からも行政からも必要とされ持続する社会教育施設を目指していくことなどを発表した。

（３）質疑応答

蛭田委員長　ありがとうございました。それでは各委員から質疑を行う。

蛭田委員長　学習成果の地域活用「ABC プラン」という横須賀独自の非常に特徴的な事業を掲げているが、今回はそれをベースにした発展的な「C３（C キューブ）」という新しい提案があったが、意欲的な試みを期待したい。特に講師のコラボレーションは何を目指しているのか。何をどういう方向にもっていきたいのか。

申請団体　実際にどういう風にコラボレーションをするか、ワークカフェのような形で集まっていただき、共通するテーマ、子どもや親世代、高齢者など対象を決め、一緒にできそうな人にマッチングをしていただき、コラボレーションをしていただく。実際にどのような講座が生まれるかがわからないところも社会教育らしく、面白いところだと思っている。

イメージとしてはそれぞれの講師が点だとして、点が線につながり、さらに面になるのではないかと発展性を考えてのコラボレーションである。

梨本委員　これまで市民大学講座の前に、前期講座の一部として「さきがけ講座」を実施していたが、今回のウェルカム戦略は新たにと考えてよいか。さきがけ講座との違いはどのようなものか。

関連して、受講生カムバックについて、コロナ禍で途絶えてしまった受講生に対して、働きかけを行ってカムバックを試みられるということだが、それだけ受講生は集まってくるのか、取り組みについて具体性に欠けるので、もう少し具体的に説明をしてほしい。

申請団体　さきがけ講座はご指摘のとおり、４月は行政があまり事業を実施していない時期で、需要があると思い、市民大学を４月から５月の短期にかけて以前より実施をしてきた。今回はさらにその特徴を活かして、単発、無料、著名な人を呼ぶなど、そのようなことに特化してウェルカム戦略として市民大学講座 PR のために行い、講座の中で「やりますよ」「だから無料ですよ」と PR をする。

受講生カムバック戦略の具体性については募集要領の資料集 12 ページから 14 ページに令和元年度市民講座一覧として実績が載っている。実績の中で例えば「大江戸巨大都市の建設とインフラ整備」は受講者数 186 人、「日本仏教史の小窓」は受講者数 134 人、「平家物語を読む」は受講者数 140 人の規模の講座がすでにある。過去の実績からみて、そのくらいの規模の講座を令和４年度に固めて行う予定である。コロナの影響がなければ、過去に 1900 万円達成している年もあるので、無理ではないと考えている。

櫻井委員　来年度の大河ドラマ（※鎌倉殿の 13 人）とタイアップしたテーマで三浦一族はキャッチーでよいと思う。しかし、大河ドラマは１年という範囲だと思うが、それ以降の策や案はあるのか。

受講料の収支決算書で令和４・７年が 1900 万円、令和５・６・８年が 1800 万円で計上されているが、100 万円の差は根拠があるのか。

今後のコロナの対策はどのように考えているか。

申請団体　来年度は大河ドラマのタイアップとして三浦一族をやっていこうと思っている。令和４年度以降も継続的にやっていこうと思っている。大河ドラマがたまたま令和４年度に三浦一族も関係するものを取り上げたのであって、今までも大河ドラマに関するテーマを扱った市民大学講座を毎年やっていた。横須賀に限らず、市民の方に大河ドラマに関連するテーマの講座は人気があるので、大河ドラマに関連した講座はずっと続けていこうと思っている。

収支決算書について具体的に話すのは難しい。令和４年度はとにかく集客をやっていこうと思っている。指定管理期間が５年間なので、３年間は様子を見ていき、令和７年度にビッグヤードを起こしたいと思って 100 万円を計上させていただいた。

コロナについての対策は、正直な話、基本的には来年度はコロナの影響がないとして、提案をさせていただいている。ただ、現状としてはコロナの影響は残ってくると思うので、そういう意味ではオンラインの講座の導入等がなかなか進んでいないが、それを含めてやっていこうと考えている。この２年間で職員のコロナ対策のスキルが上がってきている。

市民大学の受講生だけに限ると、受講の方々もコロナに慣れ、恐怖感がずいぶん減ってきていると思う。楽観的かもしれないが、究極的に危機に迫ってしまう影響はなくなるのではないかと考えている。

渡邉委員　地域貢献について、市役所市民部ではコミュニティセンターの運営を行っている。コミュニティセンターも社会教育施設の一端を担っていると思っているが、地域と連携するというところでの地域貢献とすると、地域のコミュニティセンターでは割と地元密着型の講座を開設させていただいているが、生涯学習財団での市民大学の在り方としての違い、本来であればもう少し共同というか一緒に考えていってもいいのかなと個人的な思いもあるが、生涯学習財団ならではの市民大学の在り方と、コミュティセンターとの違いの出し方をどのように考えているか聞かせていただきたい。

申請団体　コミュティセンターと生涯学習センターの違いとして、市民大学講座について、コミュニティセンターは基本的には学級活動とか、入門講座など初心者向けの趣味、教養などの実用講座をやっていくという考えであるのかと思っている。一方、生涯学習センターでは、専門的な内容ということで短期大学や大学教養講座レベルの講座を中心に実施していくようにと仕様書でもうたっているが、それを基本にやっていければと思っている。

渡邉委員　提案の計画書の中で、今後コミュニティセンターでの市民大学の講座企画をされていくというような記載があるが、その市民大学というのは少し上級者向けの形をそのまま考えているのか、もう少しコミュニティセンターよりの講座に少し変えていく形を考えているのか。

申請団体　内容としては、少し住み分けをしたいと思っている。ただ、生涯学習センターで行っている市民大学は日数が多く、6・8・10 回などなので、コミュニティセンターで行う出張出前講座についてはもう少し短い期間で行うことを考えている。

渡邉委員　できれば、コミュニティセンターでの指導員がいろいろな講座を企画しているが、専門的なノウハウというところでは、生涯学習財団に敵うものはないので、ぜひ協力させて、ご指導いただきたいというところである。今後コミュニティセンターの指導員とのコラボというところでお互いに協力しながら講座を仕立てていただく、協力いただける場面が増えるといいなと期待をしている。

広報活動というところで新しい情報発信の企画、提案がされているが、なかなか生涯学習センターに来たことがないという地域の方が多いので、そういった意味ではコミュニティセンターの文化祭においでいただくことはあるが、逆に地域の文化祭をこちらに取り込む、地域の方が生涯学習センターに来る仕組みを行政センター、コミュニティセンターと連携をしていただけると新しい利用者の獲得にもつながるのではないかと思っている。情報発信の中でも地域との交流を今後していただけた

らいいかなと期待をしている。ぜひ今後提案をしていただけるとありがたいと思っている。ぜひ、地域のほうにも出ていただく機会も増やしていただきながら、生涯学習センターを見るということに門戸を開いていただくことが必要だと思っているので、地域に存在感を示していただくような機会を作っていただけたら、コミュニティセンターとしても相乗効果があるのではないかと思っているので、ぜひ期待したい。

髙橋委員　提案事項にあった人権講座を市民大学に取り込むことについて、人権に関しては市として政策を出していくということを訴えかけていくということも必要かと思うので、市の人権講座はこのまま行う。生涯学習センターで人権講座を行うときにご協力いただけるところはご協力いただく、仮に人権・男女共同参画に関わることを生涯学習センターでやっていただくときはそれでもよい。いろいろなところでやっていくということに意義があると思うので、その一点をお願いしたい。

発表を聞いて、横須賀市にとって必要な団体であると感じた。これからも長く存在していただきたいし、活動していく必要があると考えた。中でも市に有益な活動を行うからこそ、生涯学習財団の赤字体質を改善していかなければいけないと思ったのだが、今日の発表を聞いて、400万円市民大学でアップする等、いろいろ提案をされているので、そういうことは赤字にならないという体質改善をはかっていくことの現れだと感じたが、そのようにとらえてよいか。

申請団体　はい。

髙橋委員　提案書の中では全体が「〇〇をしています」という現状を表す表現が多かったが、提案としては、現在行っていることは今後も継続して行っていくということでよいか。

申請団体　はい。

髙橋委員　シティサポートと連携をしていくという話がでているが、例えばシティサポート等外郭団体ごとの得意分野があると思うが、そのような得意分野を組み合わせてタッグを組んで、これからも活動に取り組んでいくということでよいか。

申請団体　はい。

髙橋委員　全体的に「検討します」という表現を使われているが、これも実現させる方向で前向きにとらえていると受け取ったがそれでよいか。

申請団体　はい。

髙橋委員　勘違いをするといけないと思ったので確認する。図書室の臨時職員、パート職員の勤務時間を削減する提案について、サービス低下につながるのではなくて、その部分は事務室の職員が補うなどするととらえたがそれでよいか。

申請団体　はい。

蛭田委員長　ほかにご質問があればお願いしたい。

各委員　特になし。

蛭田委員長　それでは、これで質疑応答を終了させていただきたい。公益財団法人横須賀市生涯学習財団のプレゼンテーション並びに質疑応答を終了する。ありがとうございました。

（４）閉会

事務局が申請団体にお礼を述べ、申請団体の退室後、委員長が閉会の挨拶を行い、閉会した。

事務局から各委員に次回の日時、会場の連絡、進め方などを説明し、終了した。

本委員会の議事の経過概要及びその結果を証するために議事録を作成し、委員長が次のとおり署名した。

令和３年 10 月 11 日

生涯学習センター指定管理者選考委員会

委　員　長　　蛭　田　道　春